

第40回異文化交流研究施設講演会

ミシェル・ド・ボアシユ

2023年2月11日（土）に、異文化交流研究施設による第40回講演会が小講義室で行われた。講師として茨城キリスト教大学文学部のジャブコ・ユリヤ先生を迎えた。社会言語学専門のジャブコ先生は、「ロシアによるウクライナ戦争一言語の関係」について話した。今回の講演では、ウクライナとロシアとの関係に対する理解が深まって、参加者には大変好評であった。ジャブコ先生の発表を次のように要約することができる。

はじめに

2021年7月にプーチン大統領は「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」という論文を発表した。論文の最大の主張点は「ロシア人とウクライナ人は歴史的に一つの民族である」ということであった。こういった意見を正当化するために、プーチン大統領は「ウクライナ語は歪曲されたロシア語にすぎない」と書いている。ジャブコ先生はまず、その判断を言語学の観点から検討した。ウクライナ語は確かに、ロシア語のようにインド・ヨーロッパ語族のスラヴ語派の東スラヴ語群に属し、キリル文字によって表記される。しかし、最も近い言語はロシア語ではなくて、ベラルーシ語である。スラヴ諸語との共通率（すなわち、共通の語彙）を検討すると、ウクライナ語に一番近い言語は次のようである：ベラルーシ語（84%）、ポーランド語（70%）、スロバキア語（64%）、ロシア語（62%）。また、スラヴ諸語との共通点（すなわち、音声と文法）を検討すると、ウクライナ語に一番近い言語は次のようである：高地ソルブ語・ベラルーシ語（29の共通点）、低地ソルブ語（27の共通点）、チェコ語・スロバキア語（23の共通点）、ポーランド語（22の共通点）、クロアチア語・ブルガリア語（21の共通点）、セルビア語・マケドニア語（20の共通点）、ポーラブ語（19の共通点）、スロベニア語（18の共通点）、ロシア語（11の共通点）。つまり、ウクライナ語は「歪曲されたロシア語」であるどころか、スラヴ諸語の中ではロシア語からかなり遠いと言ってもいい。プーチン大統領の、ウクライナ語に関する意見は言語的な根拠がないが、ロシア帝国とソ連の、ウクライナ語に対する態度を反映している。1654年から1991年までは、ウクライナ語は100回以上禁止されたのである。

1) ロシア帝国・ソ連におけるウクライナ語の状況

18世紀から20世紀の初めまでは、ロシア帝国はウクライナのロシア化を積極的に実施しようとした。ロシア帝国でウクライナは「小ロシア」、ウクライナ語は「小ロシア語」と呼ばれていた。1863年に、ウクライナ語の使用が「ヴァルーエフ指令」によって制限された。文学書以外には、ウクライナ語の本を刊行することが禁止になった。ヴァルーエフ内相によると、「ウクライナ語は存在しなかったし、存在していないし、これからも存在し得ない。大衆によって使われている言葉はただポーランドの影響に歪められたロシア語の方言にすぎない」そうであった。また、1876年には文学書を含めてウクライナ語の出版物が全面的に「エムス法」によって禁じられた。1908年に、ロシア帝国元老院は「ウクライナの文化・教育活動の有害性」を指摘した。こうして、ウクライナ人の言語アイデンティティが問題となった。タラス・シェフチェンコ（1814-1861）のようにウクライナ語で文学作品を書くウクライナ人もいたが、ニコライ・ゴーゴリ（1809-1852）のようにロシア語を使用する作家

も少なくはなかった。

ロシア帝国が倒れると、1921年と1931年の間に所謂「ウクライナのルネサンス」が起こった。1920年代に、ソ連全国でネイティヴ化、すなわち母語教育の復活が実施されたからである。1922年にウクライナ共和国の教育機関で、ウクライナ語は必須科目になった。また、1928年にウクライナ標準語の文語の音声学的・形態論的な構造を法典化した『ウクライナ語正書法』が刊行された。同時に、新たな文化・文学・芸術世代が現れた。

しかし、1930年代にスターリン政権に支配されるとソ連の政策は急激に変わった。1930年にウクライナ学術語研究所は廃止された。三年後、1928年の『ウクライナ語正書法』は「民族主義」であると批判され、ウクライナ語とロシア語を統一化する新たな『ウクライナ語正書法』が採択された。例えば、アルファベットや第三変化名詞の語尾が変えられ、名詞の呼びかけの語形がロシア語に合わせられた。1938年に、ウクライナ語を教授言語とする小学校では、ロシア語は3年次から必修になった。つまり、「虐殺されたルネサンス」の時代であった。ウクライナ化を推し進めてきた指導者は「民族主義的偏向である」と批判され、26万人程のウクライナ人の知職人や文化人は処刑され、または強制収容所に送られた。

スターリン政権は1953年になくなったが、ソ連は言語政策を変えるどころか、ウクライナ語に対する意図的な言語的抑制の政策をさらに進めた。こういった政策は、ロシア語が格上で都会の言語であるのに対し、ウクライナ語は未熟で田舎の言語である、というステレオタイプに基づくものであった。1959年に共産党中央委員会は「学校と生活のつながりを強化し、公教育をさらに発展させることについて」決議した結果、学校教育でウクライナ語はただの選択科目になった。翌年には、1933年の『ウクライナ語正書法』第4版が発行された。1956年にロシアで発行された『ロシア語正書法・句読法規則』に接近することとなった。この1960年の版は1990年まで公式の正書法であった。

1960年代に中央委員会は「国民の統一」という国家プログラムを決定した。ウクライナ語の地位はこのプログラムによってさらに悪化した。例えば、1970年にソ連の文部省はロシア語を教育と科学の言語とし、博士論文をロシア語のみで作成するよう法案を可決した。また、1989年に中央委員会はロシア語を「唯一の国家言語」にした。こういった政策のため、ウクライナ語で教えるウクライナ語学校は1950年と1989年の間に80%から49%へ落ちた。

よって、ウクライナにはバイリンガルとダイグロシア状況が存在している。ソ連で生まれ育った多くのウクライナ人にとっては、ウクライナ語よりロシア語の方が親しくなった。ジャブコ先生は2020年と2022年の間に、様々なウクライナ人にそのことについてインタビューしたが、次のような答えをしばしば聞いた。

「子供の頃からロシア語を話そうとしていました。なぜならロシア語はより格上だったからです。ロシア語は大学教育とソ連の科学の言語でしたから。ソビエトの全民族のコイネーでしたから。」
(男、50代、翻訳者・編集者)

「私の母語はロシア語だと思っています。私はソ連で生まれていつもロシア語を使っていました。ウクライナ語はもちろんありました。ウクライナ共和国でしたからね。学校でもウクライナ語を習っていましたが、一流のものではなかったのです。お母さんは「言語を合わせなきゃ、社会に受け入れられないから」と言っていました。」(男、50代、スポーツ・コーチ)

「私の母はキーウに生まれました。おじいさんがウクライナの村を出たエスニックのウクライナ人だったのに、母はロシア語で育てられていました。彼らは会社員だったので、都会に引っ越すことで、より良い生活ができました。ウクライナの村にいた頃の彼らの言語の使用についてはよくわかりませんが、ひいお婆さんとひいお爺さんはウクライナ語で話していました。お爺さんは都会に引っ越した時に（彼はスールジク¹を使っていました）、彼は自分の言語を変えてないかもしれませんが、自分の子供をロシア語で育てていました。」（女、30代、研究者）

「母語はウクライナ語だと思いますが、私は42歳で、ソ連の時に教育を受けました。学校教育はほとんどすべてロシア語で行われていました。大学の教育は半分半分だったので、私は日常生活で100%ウクライナ語を使っているとは言えません。キーウは特に。キーウはバイリンガルです。」（男、40代、兵士）

こうして、作家オレシ・ホンチャルはウクライナ言語状況を「言語的なチェルノビリ」として描写した。ウクライナ語が国家及び社会のレベルで一体化する機能を喪失していたので、ウクライナの文化人と言語学者が「積極的にウクライナ語の国家的・社会的地位を高める必要がある」ということを主張した。所謂「ペレストロイカ」の最後に、「ウクライナの言語に関する法」（1989年）が可決された。ウクライナ語はウクライナ自治共和国の国家語と規定され、ロシア語は「民族交流の言語」になった。ウクライナは二年後に独立した。

2) 独立ウクライナにおけるウクライナ語の状況（1991年～2014年）

ウクライナ憲法（1996年）の第10条によれば、ウクライナ語が唯一の国家言語なので、国全体のあらゆる社会生活分野におけるウクライナ語の包括的発展の実現が必要となる。また、ロシア語及びウクライナの少数言語の自由な発展、使用及び保護が保証されている。この政策の結果、1980年代に49%に落ちた、ウクライナ語で教えるウクライナ語学校は2012年に82%に上がった。しかし、ウクライナ語化政策が成功したとは言えない。

この点では、調査などの結果は微妙である。2001年に初めての全国国勢調査が実施されたが、「あなたの母語は何ですか」という質問にウクライナ人は次のように答えた（「どちらも」という選択肢はなかった）：ウクライナ語（67.5%）、ロシア語（29.6%）、その他（2.9%）。しかし、一年前に実施されたウクライナ科学アカデミー社会学研究所の調査では、「家庭では何語で話しますか」という質問の答えは次のようであった：ウクライナ語のみ（39%）、ロシア語のみ（36%）、状況により使い分ける（25%）。また、2011年の社会学研究所の言語意識調査によると、82%のウクライナ人はウクライナ語を流暢に使うことができたが、84%のウクライナ人はロシア語を流暢に使うことができたそうである。つまり、「リードナ・モーヴァ」（母語）という概念は、多くのウクライナ人にとっては曖昧である。

「私はドンバス²で生まれました。そこでは皆ロシア語で話しています。そして、村で住んでいる私のおばあちゃんたちはみんなウクライナ語、まあ、スールジクを話しています。〈略〉おばあちゃんは私が住んでいる都市に来て、ウクライナ語で話していた時、都会のみんなは「あなた

¹ ロシア語とウクライナ語の混合語。

² ロシア語を話す人が特に多い、東部の地域。

は都市の人じゃないね、村人だね」という態度でした。それで私はロシア語に慣れてしまいました。〈略〉ウクライナ語はもちろんリードナ、よりリードナです。より一般的なのはロシア語ですが。私はドンバスの出身者ですから。私の頭の中に壁のようなものがあります。リードナ・モーヴァは一つの言語で、普段話している言語は別の言語です。」(女、30年代、溶接工)

「リードナ・モーヴァは二つあります。なぜなら私は同じようにロシア語とウクライナ語を使うことができますから。」(女、30代、英語講師)

また、2012年と2014年の間に、ウクライナ語化政策に対する反発が起こった。「二つの言語、一つの民族」というスローガンを掲げた親ロシア派の地域党が国民議会議員選挙で成功を収めたため、2012年にウクライナ憲法に違反する「国家言語政策基本法」が提出された。この「新言語法」の目的は、ウクライナにおいて「地域言語」、すなわち行政地域内で人口の10%以上の母語話者がいる言語を使用する権利を保障することであった。こう言った「地域語」は国家語のウクライナ語と同等に裁判所、学校、他の行政施設において用いられることが可能になった。その結果、ウクライナの全27州のうち13州でロシア語が第二公用語となった。2013年に、テレビの言語使用は次のようであった：ウクライナ語放送(30%)、ロシア語放送(44%)、言語が切り替わる放送(26%)。また、新聞と雑誌の言語使用は次のようであった：ウクライナ語の新聞(29.5%、1995年は50%)、ウクライナ語版の雑誌(10%、2010年は19.6%)。こうして、ウクライナ語政策は失敗したと言えるだろう。

「我々のバイリンガリズムは帝国の勢力拡大の結果、またリードナ・モーヴァ(ウクライナ語)の強制的な除去の結果です。そしてこれはウクライナ人を民族として殺すという目標の結果です。」(ラリサ・マセンコ、キーウ・モヒラアカデミー)

「ヨーロッパの国々の中で、ウクライナはエスニック・マイノリティの言語を国家語と同じように使用し、ある地域では国家語がマイノリティ言語として扱われることのある、唯一な国なのです。」(テチャーナ・フデレロ、ザグレブ大学)

3) 独立ウクライナにおけるウクライナ語の状況(2014年～現在)

2014年2月27日に、ウクライナにおける言語的な差別を受けているロシア語系住民の保護を理由として、ロシア軍はウクライナへ侵攻し、クリミア半島を掌握した。プーチン大統領はその時に「我々はウクライナのロシア系民族と、民族的のみならず文化的、言語的にもロシアと親近感を持ち、より広い「ロシア世界」の一員であると感じているウクライナ人を守っていく」と言った。しかし、2014年9月に実施された、ウクライナ共和国国際研究所の世論調査によれば、ウクライナのロシア語話者は危険をあまり感じていなかった。「脅威や圧力を感じているか」という質問に88%が「感じていない」と答えた。「ウクライナ語は単一国家語であり続けるべきであるか」という質問には80%が「続けるべき」と答えた。ジャブコ先生のインタビューを受けた一人の女性がこう言った。

「ウクライナにいるロシア語話者を保護する必要があるというのは、大嘘です。今でも人々は自由にロシア語を使っています。ドンバスとクリミアにいる人の唯一のクレームは、彼らが職場でロシア語を使うことができないことや、薬の説明書がウクライナ語で記載されていることです。」

これらはロシアで考えられている人権差別と呼んではいけません。私はロシア語話者の家族の一人にも関わらず、公式的な場でウクライナ語を使うべきだと考えていますし、サービス分野、裁判所や国営施設でもウクライナ語を使うべきだと思っています。」(女、30代、研究者)

この状況の中で、ウクライナの憲法裁判所は2014年10月に、2012年の「言語法」の合憲性の審判を開始し、2018年2月28日に同法が憲法に違反すると議定した。また、2019年4月に、ウクライナ最高会議は「国家語としてのウクライナ語機能保障法」を採択した。その結果、国家機関やサービス分野（観客、訪問者とのやりとり）においてウクライナ語にするという規範が発効され、ラジオ・テレビ放送でもウクライナ語が使用拡大された。

2022年2月24日には、ロシアの全面的な軍事侵攻が始まった。プーチン大統領によると、この「特別な軍事作戦」の理由はウクライナ東部の住民を保護することであった。ロシアがその時ウクライナに伝えた六つの要求の中には、「ロシア語を第二国語とする」ということがあった。しかし、3月にレイティング社によって実施された世論調査で、「ウクライナ語は単一国家語であり続けるべきであるか」という質問にウクライナ人の83%が「続けるべき」と答えた。さらに、7月にキーウ国際社会学研究所によって実施された世論調査では、「あなたは何よりもまず自分を何者とみなすか」という質問に、85%は「ウクライナ国民」と答えた。ジャブコ先生のインタビューを受けた人の答えも同じような気持ちを表している。

「周りにいる人を見て言えるのは、24日の夜から、この言語問題は道義的なものになりました。以前はウクライナ語に切り替えた時に、話し相手と違和感を感じたりしたことがありましたが、今は全くありません。」(男、40代、兵士)

「ロシア人は(略)ロシア語を立てていたのに、ウクライナ語に屈辱を与えたり、消滅させたりしたことがあったでしょう。歴史的にウクライナ人の意志に反対され、こうなりましたね。我々のおじいさんたち、祖先は？彼らの言語は何語でしたか。なぜ我々は自分のルーツを忘れているのですか。なぜウクライナ語をより強化させていないのですか。ウクライナへの愛情を強調しながら、言語を別にしています。言語は国家の心ではないでしょうか。」(女、40代、専業主婦)

まとめ

2014年2月に開始したロシアによる戦争は、ウクライナ人のナショナル・アイデンティティに非常に大きな変化をもたらしたと言えるだろう。また、2022年2月に開始したロシアによる全面的な戦争は、ウクライナ国家の存亡を懸けた闘いにも、ウクライナ人としてのアイデンティティを失う危機にもなる。現在も続くロシア・ウクライナ戦争は、ウクライナ領土でどの国家が存在するか、その国家でどのような国民が住むか、またその国民はどのような言語を話すか、という問題を解決する実存的な戦争である。